琵琶機関紙
京紘
第二八四号　京紘社

幕末動乱異聞 〝村田蔵六〟

辻　旭城

幕末から明治にかけての山口は、萩と並び新しい日本を生み出す震源地となった。そして維新発祥の地ともなった。

村田蔵六は、山口市郊外の田舎医者の子で、父が無類の医学好きであったところから、蘭学者緒方洪庵に子供の頃から師事させ、その天成の聡明さによる急速な上達ぶりに、父親も目をまわしたといわれる。

やがて青年となった蔵六は、伊予宇和島城主の耳にも達して、たびたび御殿に招かれて治療するまでになった。街の藪医者の出入りを禁ぜられていた時代だけに、すぐれた名医だった。

しかし風雲急を告げる幕末、その変動で米や野菜などの値段が上昇し、里人たちは病気をしても医者にかかる費用なく、半ば失敗したので治療を父に委せて、蔵六は洪庵の手引きで江戸に上り、幕府講武所の師範となって、藩士に医学と兵学の両道を教えていた。

このころ徳川の藩士を始め江戸庶民は、尊皇派と攘夷派に分かれ、広く国内でも喧躁がつづいた。こうしたことで講武所の学徒たちも動揺して休講が続いたところから、蔵六も帰国して長州藩士となり、維新の根拠に活躍することとなった。

会津若松城の悲劇的な敗戦による開城、明治四年九月二十八日には、荘内の鶴岡城と同時に、仙台の青葉城接収が終り、奥羽諸藩全部が鎮定されたので、官軍は軍の一部を現地に駐留せしめて引揚げることとなり、九月末東京へ凱旋した。総督、参謀、監軍など、凱旋軍の首脳には江戸城西之丸御殿に於いて、天皇より直接稿いのお言葉があり、結構な御酒肴を賜った。

やがて十一月に入ると各藩兵とも、それぞれ国元へ引き上げ、その後は薩長土肥各藩が交替で、帝都の警備に若干の兵を派遣するにとどまり、新政府の護りは貧弱であった。

そもそも明治新政府の当初は直属兵力がなく、戊辰戦争に際しては、列藩に命じて藩兵を派遣せしめ、征討軍を組織し堂上方を総督などに任命したが、実際の指揮権は雄藩から選抜された参謀が握っていた。そしてこれら諸藩連合からなる先鋒軍を統轄するために、中央に軍防事務局が設置されたが三ケ月余で廃止され、大政官内に軍務官が新設されて軍務を統べることになったが、これらの実権は軍防事務局より判事の栄転にあり、軍務官副知事に任ぜられた長州藩士大村益次郎が掌握することになった。

軍事の天才といわれる大村は、逸早く明治元年四月、陸軍編成法を定め「各藩より石高一万石につき兵員十名ー当分の間は三名ーを出させて、京都その他畿内の警備にあて、又各藩警備のため一万石につき兵員五十人を常備しおくこと」を命令した。だが、これは当時の国々諸藩の財政的窮乏の実状から見て到底実行は不可能で、遂に空文に終って了った。

更に同二年七月には官制改革を行い、軍務官を廃止して兵部省を設置し、小松宮彰仁親王を兵部卿に戴き、大村益次郎は兵部大輔に任命されて、引続き実権を掌握した。

ここで〝京紘〟愛読者各位にお断りしなければならない。昔は一人で幾つも名の変わることである。村田蔵六と大村益次郎、これは同一人物なのである。

大村益次郎は冒頭に於ても触れたが、彼は文政七年三月十日、周防国吉敷郡鋳銭司村大

錦心流一水会多摩支部研修会

十一月二十日昼一時小金井市福祉会館（支部長伊藤磐水氏）。月下の陣ー伊藤静效▼棄児ー篠宮欅水▼紅葉狩ー小川吐水▼坂崎出羽守ー加藤錦陽▼父乃木将軍ー伊藤磐水▼広瀬中佐ー吉田誠山▼濤陽江ー石井效水▼五条橋ー菊地甘水▼本能寺ー中村修水▼白虎隊ー清水源城。以上研修を終り乾盃して六時閉会。

日本芸術琵琶柏会十二月例会

十二月十八日昼一時東京西新宿柏ビル六階。門琵琶外弾法ー山崎錦幽▼春の調べー坂入俊風▼井伊大老ー青木早水▼利久の最期、小曲隆盛ー錦幽▼竜の口ー橋本草水▼鉢の木(上)ー長谷川錦舟▼同(下)ー杉山旗水▼平家都落ちー雨宮映月。以上演奏の後小宴を張り八時散会。

京都琵琶協会一月定例茶話会

一月十六日昼二時京都西大路駅前レストラン「京みやこ」。（次号詳報）

（転居）

〇：山内兼光氏　愛知県豊明市二村台四丁目二ノ三（電話〇五六二(92)七〇〇五番）

〇：野尻源次郎（摂水）氏　吹田市千里山高塚八〇一ノ九（電話〇六(380)六二二一番）

（訂正）

〇：京紘二八二号
七頁旭会全国大会の翌二十九日「姫路市に於て総会、懇親会」は「神戸市かもめ荘に於て総会、懇親会」の誤り。

〇：京紘二八三号
七頁野田彩水氏の電話「〇五四七番」は「五四四七番」の誤り。

（予告）

〇：京都琵琶協会二月定例茶話会　二月五日(日)昼一時向日市寺戸町二枚田四番地会員古谷竟水氏宅（阪急東向日町下車、線路に添い西へ約一五〇米）電話九二一ー七八九四。

〇：日本琵琶楽協会関西支部第一回名流演奏大会　三月十一、十二日(土)(日)十時ー十六時京都烏丸通夷川京都商工会議所ホール。（薩筑各派の名流三十九人出演）。

あとがき

毎年のことながらお正月の屠蘇機嫌でついうかうかと過ごしている内に早くも酷寒二月を迎え今更ながら日時の経過に驚くばかり●京紘が紙面を通じて琵琶文化の向上、琵琶楽の振興発展を三大目標に精進していることは折りに触れ毎度申し上げる通りである●読者諸彦に於かれてもこの主旨を諒とせられ御協力下さってお気がつかれた事は啓蒙のため精々御寄稿御垂教頂きたい●筆者は若い頃先輩から「演奏会では上手に演奏したいと決して考えるな」と教訓された●聴く人が「上手だ、うまい」と感心するのは聴者の立ち場からの批評で演者の関知しないところである●歌が下手でも声が良くなくても、弾法が不充分であろうとも気にするには及ばない、聴く、聴かないは聴者の自由で演者自身が真剣に一生懸命弾奏すればよいのである●と云ってしまっては味もそっけも無く、公開の演奏会ではこれでは通用しない、公開の場合は飽くまでも聴衆が本位で聴衆を満足させなければ演奏者の責任は果たせない●歌曲に全身全霊を打ち込んで無我の境地に入り歌中の人物になり切って演奏すれば聴衆は必ず感動するであろう●上手だ、下手だというのは聴者が決めるもので徒らに小力細工をして無理に上手にやろうとするから文字通り無理が出来る●演者は心で演奏し聴者は心で聴くのが真の琵琶である●以上は筆者が修業時代の若いころ尊敬する先輩から訓された言葉の受け売りである。

昭和五十三年二月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京紘社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六(七三)六〇五一番

字大村の漢法医村田孝益の長男として生まれた。性利発、幼名を惣太郎と呼び、村人達も神童として敬服した。長じて蔵六、後大村益次郎と改名し、二十五才の若さで緒方洪庵熟の熟頭を勧めるほどの秀才であったが、医学のみでは満足せず、兵学、築城、砲術まで研鑚し、遂に兵術家としても一家をなすに到った。その新智識を買われ、宇和島藩主伊達宗城に兵学顧問として招聘されたが、やがて長州藩主から召喚されて帰藩し、周防藩校博習堂の兵学教官を任命された。

その後馬関の攘夷戦前後から、高杉晋作の統轄する奇兵隊に関係し、両度の長州征伐には高杉と共に奇兵隊を率いて戦い、突撃面に於ても兵術の第一人者とうたわれるに到った。

明治元年五月の上野彰義隊討伐には、当時声望天下を圧した総督参謀西郷吉之助をさしおき、官軍の総指揮を執って作戦通り半日にしてこれを壊滅〝薩摩っぽ〟をして切歯扼腕させたのである。

明治新政府内にあっては、軍務担当者として終始指導的、中心的地位を保ち、わが陸軍の創始者の一人となった。彼の軍事思想は〝長州奇兵隊の育ての親〟とうたわれるように国民皆兵、徴兵制の主唱者であり、殊に明治二年六月、新政府の兵制会議では大久保利通中心の薩摩派を向うに廻して、五日間に亘る大論戦に徴兵論をプチ上げた。が、彼の理論は余りにも進歩的且つ卓抜すぎて受け入れられず、士族中心の常備軍編成という旧套論に破られた。しかし彼は依然として軍政の中心的指導者として、政府直属の鎮台兵の創設、将校養成機関としての士官学校開設等、着々と新構想を実践に移し始めた。

これが頑冥固陋な、いわゆる石頭の保守的士族の憤激を買い、更に彼の廃刀令の唱導は火に油を注ぐ結果となって、明治二年九月四日京都木屋町の旅館で、兇徒数名に襲われ重傷を受けて病院に入院したが、十一月五日惜しくも逝去した。時に四十七才であった。

我が道を行く

六十五年（五六）

西郷天風

人の噂も七十五日とか、血盟団の噂もそろそろ忘却に近づいた或る日、又しても天下の耳目を驚かす大事件が、五月空に舞い上がった。我が海軍の青年将校の一団と、民間側橘孝三郎の愛郷熟生等によるクーデター的事件突発で、時の総理大臣犬養首相は官邸で〝話せば判る〟と叫び乍ら、三上中尉の〝問答無用撃て〟の号令と共に消え去った。いわゆる五・一五事件に続いて、不発ではあったが神兵隊事件として、仲々注目に価する民間有識者団体の奮起するなど物情騒然たる折柄、我が大日本琵琶国風会では在京の友好団体からの依頼により、水戸の上市（かみいち）下市（しもいち）の両劇場に於て、時局大講演会を同時開催の準備一切を引受け、私は其際「愛国詩人ダヌンチオ」の一曲を弾奏するつもりで張り切っていた。

当局でも、県の三部長をはじめ市内外の名士七十余の後援による大日本琵琶国風会が世話役である〝時局向きの催し〟というので簡単に許可し、私も亦、左程うるさい催しとは思わず、開催日の三日前に届いたポスターをその夜のうちに貼りつくしてしまった。それ等は琵琶会の時と同様の行為で何等作意があった訳ではなかったが、警察当事者はそう単純に見すごしてはくれなかった、弁士の中に当局の注意人物が居ったことから、当日の水戸駅には朝から特高刑事が張り込んでいた。

ところが、その裏をかいた一行十数名は一台の観光バスを借り切って、東京から直接会場へついてしまった。

そうした事が警察当局の心証を害したのであろう、上市の常磐座と下市の劇場と同時刻に開演して弁士は交替の手筈だったが、私が受持った下市の劇場では、順調にしかも好評裡に三人目迄済ませ、四人目を迎える段になって、上市の常磐座から来る筈の弁士が顔も見せず連絡もない。結局臨検の刑事が「演説中止」の乱用に、腹をすえかねた弁士達と、角袖や正服警官等二十人余の乱闘となり、やがて興奮した聴衆までステージに駆け上って活劇に加わる大騒動となり、数人の検束者まで出る始末で、連絡どころではなかった。

それとも知らず下市組では、予備の弁士でお茶をにごし、予定通り上市の常磐座に合流を早めて来て見れば、満員の筈の客は一人も居らず、我々の仲間は附近のそば屋などに集まって、検束者釈放交渉の結果を待っておる有様だった。

以上のような次第で、それから後の私には何事かあるごとに尾行がつく状態となり、遂に水戸を去ることになったのが昭和九年の秋だった。

顧みれば、その数年間に起った血盟団、五・一五、神兵隊から二・二六まで、一連の事件はすべて水戸人が中心だったようである。

我が大日本琵琶国風会も此処で消滅したが、琵琶界はこれからが本番の感を深からしめたのは、日本唯一の放送局、JOAK、今のNHKが、全国放送琵琶大会の計画を発表した。

初めのうちは〝名人位決定放送大会〟と銘打っての報道に勇躍、参加を申込でみれば、其時東京だけでも既に、私の順番が三百番を越していた。

やがて予選演奏が近づく頃には名人位決定と云うのを、単に全国放送琵琶大会と改められ、少々張合いが抜けた感じながら、成行きに任せることにした私だった。

いよいよ当日、会場の銀座交詢社階上に至れば、聴衆は元より受験者の多いのには一驚を喫した。聞けば東京地区だけで、何と六百名を数えたのである。

演奏場の設備を見れば、先づステージの演奏座を左右に二分して中央を壁で仕切り、前面客席と演奏席との間に大衝立を発て、演奏者が誰か知られぬように仕切り、審査員は遠く愛宕山放送所に陣取って、演奏者の名は知らせず、弾奏のみを有線に依って聞き採点する仕組だった。

大阪夏の陣（七）

山川流水

元和元年（一六一五）四月二十九日の樫井の合戦は、「覚書」「戦記」「聞書」など色々あって、戦闘詳報が様々に伝えられているが、「大阪軍記」によると大阪城の大野主馬治房は、一万二千の軍勢を以て貝塚まで進み戦の手配をするが、貝塚の人達が陣中見舞に酒肴を献上して乱暴をされないように大野治房の御機嫌をとった。大野は渹然となっていると、岡部大学はこの様に哀想をつかし、無断で部下を引連れて前進した。

そのあとで塙団右衛門が本陣へ来たが、塙と岡部は元来が犬猿の仲で、岡部が抜け駈けを知った塙は直ちに我が陣中に戻って進軍をはじめた。

樫井の川向うには浅野長晟が陣を敷き、その先鉾は上田主水で土地の地理に詳しく、両三日の雨で川が増水してその浅い所を選んで迎撃し凄い戦闘を開始したが、この最中に塙団右衛門の軍勢が到着、これを見た浅野の軍師亀田大隅「珍らしや団右衛門、絶えて久しき対面ながら敵となり味方となった今日、是非に及ばん」と、二千余の同勢を連れて進撃して来た。団右衛門方は後続部隊がなく、この戦で塙の馬は斃れ、自身も数ケ所の手傷を受け、武勇勝れた部下の坂田庄三郎に後事を托して、槍を杖によろめきつゝ蟻通明神の境内に入り一と息ついた。

ふと見ると捨て石に腰をおろした侍、刀は鋸の如く体は満身創痍で虫の息の大学が苦しんでいる。「大学か」「おゝ団右衛門か」「岡部、貴様とは僅かの行違いから不仲となったが、お互いにこの樫井川を三途（さんず）の川とし仲直りをして冥土へ行こう」「団右衛門よく云って呉れた、手を取合って冥土へ行こう」二人は手洗いの水を分け合って飲み干し、大学はよろめく足を踏み占めて再び前線に赴き壮烈な最期を遂げた。

団右衛門も、同じ死ぬならば親友亀田大隅にこの首をやろうと、苦しい息の下から大声で大隅る呼び、刀合せから組討ちの後名誉の最期を飾った。

「大日本史料」によると、夏の陣の始まる頃、浅野長晟の和歌山領内の各地に不穏な空気が漲っていた。冬の陣の十二月七日にも吉野、熊野で郷土豪族が暴動を起し鎮圧したが、

今度も郷土の動きに只ならぬものがあった。

領内の郷士、地侍はもともと浅野の家臣ではない。各々私領を持ち小さな城を構えて農民を支配していた。それなのに浅野家が和歌山城主になって以来、この私領に対しても年貢税金を徴収するようになり、郷士の権力収入は激減し浅野長晟は恨まれた。

東西の風雲急となるや、大阪の浪人募集に応じて領内から入城する者が少なくなかった。大野治長は郷士団に密使を出し、長晟の軍勢が大阪に進発したあと、その後方から攻撃するように工作し、大阪からの和歌山攻撃軍を挟み討ちする計画を建てた。

塙団右衛門らが樫井に進発したのに、総大将大野が貝塚に腰を据えたまゝ戦闘指令所を前進しなかったのは、和歌山領内の騒乱発生を待っていたためだとされている。

和歌山県名草郡山口村（現和歌山市）の山口喜内安弘や波有手（現泉南市）の後藤六兵衛興義、淡輪（たんのわ）の淡輪六郎兵衛重政も、元は皆数万石の私領を支配し親戚交際をしていた。山口喜内は、大阪方の和歌山攻撃が始まれば、和歌山城内に侵入して人質を奪取する手はづだった。

元和元年四月、樫井合戦で大阪方を潰滅し凱歌を挙げていた浅野長晟に、領内各地で一せいに起きた放火、一揆など騒乱状況の報が入った。長晟は直ちに部隊を引返し、先づ近くの山口喜内攻撃に向ったので、喜内は大阪城内に救援を求めた。その使者は喜内の長男兵内の妻お菊である。

お菊は関白秀次の娘で、秀次が秀吉の勘気を受けて切腹、母の小督も断首された後、小督の兄後藤興義に養育され二十才で兵内に嫁入りしたが、直ぐ夏の陣で兵内は新婚七日目のお菊を父喜内に預け、弟兵吉や後藤興義らと共に大阪城に入城した。新婚の二人が大阪城内で逢えるかも知れぬという父喜内の情であった。

お菊は途中から髪を解き男装して艱苦の末大阪城に潜入したが、行き違いに夫兵内は塙団右衛門らの道案内役となって和歌山に向っていることを知り、返書の封箱を携えて喜内のもとへ復命の道を急ぎ、樫井川を渡ろうとして増水の流れに封箱を取られてしまった。お菊苦難の密使行を歌った〃手まり歌〃が今も泉南地方に残っている。

山口喜内ら和歌山騒乱事件の主謀者二十余人は浅野に捕えられて五月五日獄門、兵内、淡輪重政、後藤興義らは樫井合戦で戦死、お菊も山口一族として六月六日、和歌山大野瀬川原で刑死した。

寒中御見舞

久徳旭蘭
〒651
神戸市葺合区八幡通四丁目二ノ一七
電話〇七八(二二一)一六一〇番

田中鵬水
〒600
京都市下京区西大路八條西入北入
電話〇七五(三一三)〇三五一番

平井春嶺
〒603
京都市北区平野宮西町六四
電話〇七五(四六二)一四二三番

西郷隆盛の魅力を語る（三）

—朝日新聞から—

編集部

監視されてた？

（司馬）中国の清末に左宗棠という武将がいたが、彼は対露強硬論者、つまりロシアは永遠にアジアの害であるという考えをもっていた。その左宗棠が、会ったことはないけれど西郷を知っていて、対露緊張論者としての西郷を評価している。征韓論というのはロシアの南下を防ぐだけだったというのが私の説だ。これについて直接の証拠はないが傍証はいくつかある。西郷が征韓論に加担して、当時の征韓論的気分に乗っかってその代表になったとき、薩摩の人間数人と土佐の人間数人を非合法的に朝鮮・中国に政事密偵として出した。その中の一人が左宗棠と接触した気配がある。また別な人間が北京で左宗棠に会ったとき「おたくは国の宝を殺した」と非常に嘆いたといわれる。西郷はサトウやウイリスといったイギリス人以外に海外に知己の少ない人で、もしあるとすれば左宗棠だけだ。

（萩原）サトウは西南戦争の前に休暇でイギリスに帰り、明治十年のはじめに日本へ戻ってくる。彼は西南戦争を予想していたわけではないが、天性の観察者というのはそういう幸運にめぐり会えるものかも知れない。彼は親友のウイリスが鹿児島にいるので、東京への途中鹿児島に立ち寄りたいという申請を公使のパークスに対してイギリスから出し、鹿児島の状況を調べる訓令を受けている。このときのパークスは、九州の他の地方が非常に不安でいざというときに東京政権の頼りになるのは西郷しかいないと考えていて、鹿児島に於ける反乱を予想していたわけではない。結局、サトウは長崎から鹿児島に入るが、そこで足止めになりウイリスの家に泊まって、ここで西郷軍の連中が集まってくるのを見たりする。そして西郷が熊本へ出発した翌日サトウも鹿児島をあとにする。だから、西南戦争ぼっ発直前、あるいは西郷軍が熊本へ出発するころの鹿児島に関する最良の情報を持っていたのはサトウだ。

（司馬）日本の政治史では、へんなことがあると大雪が降る。西郷が雪道の歩きにくい後をサトウが追うように行く。ひょっとすると東京政権は倒れるかもしれないぞ、ということをサトウはじかに見てしまって、東京へ行く。しかも東京政権のある種の代表者たちと情勢に関する意見交換をするのだから、これだけの観察者を、外国人とはいえ日本史が持っていたということはちょっと不思議な感じがする。

（萩原）不思議なときの、不思議な局面にいる男ですね、サトウは。

（司馬）ちょうど鞍馬天狗みたいなもんですね。

（萩原）錦絵なんかがあっていろいろいわれているが、西郷は実際は船で鹿児島を出発して加治木までゆく。そのとき彼は面白いことに葉巻をくわえている。ウイリスは西郷を見送るがサトウは行かない。サトウはウイリスの家にいてパークスあての報告書をせっせと書いている。その数日前ウイリスが西郷に会いたいというと、いや自分の方からゆくといって西郷が二十人くらいの護衛をつれてウイリスの家にやってきた。私が気になることは、どうして二十人もの護衛がついてきたか。これは護衛というよりも逆に西郷が監視されている状況にも見える。

射殺説に背景

（司馬）城山の最後の日に桐野利秋が西郷を殺したという説がある。この根拠はあいまいで資料もないが、「翔ぶが如く」を書いていてわかってきた。桐野の心境を考えると、彼は西郷をかつぐことによって力と正義を得たのではないか。薩摩の古老たちがよく「西南戦争は良くも悪くも桐野さんの戦争だった」といったが、これはよく本質をいっていると思う。西郷は、憶病という意味ではなく痛がりで、切腹ぎらいだったはずだ。彼はむしろ弾にあたりたかったのかも知れない。以下は架空の議論だが、桐野はひょっとすると西郷が官軍の方へ走り込んでしまうのではないか

と恐れていて、彼を殺してしまわないと西郷の完全人間としての美が完結しないと思ったかも知れない。城山の最後の幹部だけの突撃のとき、駕籠から出てヨタヨタ歩いている西郷の太ももあたりに弾があたるのだが、この弾は官軍の方から飛んできたものかどうかわからない。桐野もライフルを持っていた。桐野の心境を考えると西郷を撃つという憶測も出来ぬことはない。虚像をかついだ桐野が虚像を殺したということなのだが、すでに西郷と桐野との間にはあやしい政治的関係が成立していて、西郷の死にはそういう政治の魔性がまとわりついて見える。無論私は奇説を信じない立場だからこの説をも信じないが、状況としてはありうるのだ。

（萩原）さきほど司馬さんが西郷のことを紳士だといわれたのにハッとしたのだが、イギリス人の紳士の条件として、世俗的な権力志向から一歩身を退くような雰囲気がなければ、紳士の理想像にならない。ところが西郷にはそういう面がある。

（司馬）日本的意味の紳士といえば西郷ほどの人は少ない。江戸時代は一種の倫理時代で、三百年間倫理学ばかりやってきた。酒が長い年月仕込まれていい酒になるように、幕末になると今われわれが周囲を見渡しても見当たらぬようないい人間が沢山でてくる。その代表選手が西郷だ。西郷の魅力は、未開人であれ文明人であれ西郷に会えば、これは紳士だと思わせるような普遍性を持っているところにあるのではないか。

（萩原）西郷は戊辰戦争を経過することで紳士道を高めたのではないかという気がする。それまでも相当な人だったけれど、何かギラギラするものがあった。戊辰戦争直前の江戸かくらんとかの問題をふくめての西郷にはすごみがあるわけで、あれは生まぐさいものだ。（続く）

「平家物語」を解く
叙述のつまずき

杉本　圭三郎

〃祇園精舎〃の序章から平家一門の絶滅まで、語りもの「平家物語」は、多くの挿話をふくみながら、一貫した構想のもとに叙事詩的世界をくりひろげている。その間に、歴史に立脚しながらも叙述がしばしば史実と異なるのは、物語の効果を意図する文学作品としては当然のことであろう。しかし、全体との関連では文学的虚構とはみられない齟齬もあって、「平家物語」の成立事情や形成の過程の問題を解く糸口を、そこに見出すことができる。

巻十一〃逆櫓〃の章で、義経とともに元暦二年二月三日、平家追討のため都を立ったとされている範頼が、既に巻十〃藤戸〃で前年の九月十二日に〃西国へ発向す〃と記述されていることもそのひとつで、徒然草に〃蒲冠者（範頼）の事は、よく知られざりけるにや、多くのことどもをしるしもらせり〃という事情のほかに、検討を要する問題がここにひそんでいるようである。

琵琶法師による「平家物語」の語りが、縉神（しんしん）の求めに応じての二、三の章段の弾奏であり、一章段を〃句〃と呼んだことは日記などの資料に明らかである。そして語りによる享受の歴史的経過によって〃句〃は一編としての独立的な作品構成を整えてきたと考えられる。

〃逆櫓〃の章は、一の谷の奇襲で平家を追い落とした義経が、屋島・壇の浦と追撃する門出にあたる部分で、これからの武勲を期待して、義経を主役として語ろうとする構想をもっている。後白河法皇に決意のほどを奏上して進発する義経の前に、すでに大軍を率いた範頼が平家追討に向かっていた、としたのでは、義経の英雄性は減削されてしまう。そこで範頼は従属的立ち場におかれることになる。全体的には齟齬とみられる叙述は、章段一句の自立性から起こった現象ではないか、と考えるのである。延慶本など読みもの系にもこれがみられることは、語りの先行を仮想させるものである。（法政大教授・中世文学）

〃琵琶〃

大西　一叡

京都には昔から有名な縁日が二つあります。二十一日の東寺の弘法さん。二十五日の、北野の天神さん。

弘法さんと天神さんは、えろう仲がわるうて、これまた有名です。弘法さんが晴れなら、天神さんは雨。弘法さんが雨だと、天神さんはきまって晴れ、といわれています。それは天気予報よりもたしかなくらい。両方ともに晴れの日は、めったにありません。

当日は、善男善女が広い境内を埋めつくします。何万人の人出でにぎわいます。昔なつかしい綿菓子・べっこうあめ・唐もろこし・おでん（関西では関東煮と呼んでいます）・たこ焼き・お好み焼き等々、子供の頃の夢が一ぱいに並んでいます。

植木屋ばかりの一角や、古着屋の集団もあります。地べたにしゃがみ込んで古着をひっくり返えして、掘出しものに余年のないお婆さん連。弘法さんでは、本堂前の広場にくるりと輪をかいて、数十軒の道具屋が陣どっています。

天神さんでは、参道の脇道に一キロぐらいの両側に古道具屋が並びます。この通りは骨董あさりの常連が多く、主人も田中さん（鵬水）もその一人です。いつだったか「天下の田中さん」とバッタリ鉢合わせ。例によって琵琶を手にしてご満悦のところ。七福人の布袋さんが立っているのでは、と驚いて見れば田中さんでした。巨体に抱かれると、さしもの琵琶が小さく見えます。

百五十余面所蔵。琵琶コレクション日本一の人です。どんなに遠方でも「琵琶」と聞けば「すは」と飛んで行って手中におさめます。転手（ねじ）が欠けていたり、柱（じ）が取れているもの。また腹板が破れて、ほこりまみれの楽器を、田中さんは、愛情もって復元されます。本業は繊維関係の社長。音楽の方は、殿様芸だとか。

せんだって、田中さんの琵琶行脚に便乗しました。同行四人。田中さんの愛車は一路雨の山陰を目指します。途中で、古道具屋だの骨董などの看板が目につくと車をストップ。こと琵琶となると、巨体がなぜあのように軽やかになるのでしょう。田中さんと主人が店で物色中、私は運転席。駐禁地帯なので免許証のある私が車番。ほどなく、新聞紙の包みを小脇にいそいそと戻ってきました。それは琵琶修理用の木材でした。

「つげ」は撥の材料です。「すす竹」は琵琶立ての支柱や、琵琶の柱（ぢ）になります。けやき、桑などは琵琶立ての台や、甲の材料です。

皆生温泉の旅宿について一服。間もなく今度は米子市から、修理の琵琶が三面持ち込まれました。鳴らない琵琶が田中さんの手にかかると、一夜のうちに楽器として再生します。感謝している女性から早速みつぎ物。海産物に土地の漬物から掘りたてのお芋等が、木材の断片と一諸に次ぎ次ぎと車のトランクに積み込まれて、パンク寸前の有様です。いざ宿を出発となると、今度は早朝から妙令の女性が、みやげつきでお見送り。こうして行く先き先きで、田中さんはもてもてでした。私までお相伴にあづかるしまつ。

帰路、米子駅前で銘木の看板をみて、また車をストップ。やがて桑やけやきの板切れを仕入れてきました。途中でまた田中さんの友人の、そのまた友人が待ちかねていて、二百年前に使われていたという農家のすす竹を、山ほど提供してくれました。

田中さんの人気の秘密は、一体どこにあるのでしょうか。田中さんの一連の修理は、実は奉仕だったのです。琵琶曲「千代の寿」の一節〃福徳円満〃を地で行くような人です。

（筆者は著名な一絃琴奏者で琵琶楽にも深い理解を持つ女性。ー係ー）

寸言（37）

細川ガラシヤ　明智光秀の娘で細川忠興の妻、光秀が信長を殺した際の苦悩は、娘であり妻である身のジレンマとして代表的な運命の女を象徴。石田三成挙兵の際大阪方につくのを拒み自刃した。